

古來よりありといへども、賣物とする始は、正徳のころ、築地小笠原家の道具持、沖忠右衛門と云者作之、兩國橋東岸山本善兵衛見世にてはじめて賣、

〔類聚名物考調度五〕覆御簾。おほひみす、覆鉤簾略。中今按に、おほひみすは覆翠簾にて、外みすの

事也、柱の外へ付てかくる翠簾にて有れば、覆とはいふ歟、尋常の内みすは柱の内へつけてかくるなり、此事秘事なり、

〔家屋雜考〕翠簾。翠簾は、大抵母屋と、廂と二重なり、然れども臨時の補理によりて、そのさま一様

ならず、其掛やうを註せる事ども、またあまたありて一定せず、略中總じて簾をかくる事、格子の内へたる、を内みすといひ、外へ垂る、をおほひみすといふ、母屋は内みす、廂は覆簾常の事なり、

〔雅亮裝束抄一〕もやひさしのてうどたつる事

おほかたみすをかくることは、もやはおほひみすつねの事なり、

〔禁秘御抄上〕一清涼殿略中

鬼間

二間格子也、南間常不上、有覆簾卷之

〔倭訓栞中編五〕きりすだれ 禁秘抄に、切簾と見えたり、

〔禁秘御抄上〕一清涼殿略中

臺盤所

西立布障子、其外號切簾、一間懸、遣戸御簾二間也、

〔雅亮裝束抄一〕もやひさしのてうどたつる事

まづえんでんのひさしに、みすをかけまはす、はれのかたをうはかへにす、